

天神信仰について

1、天神信仰の大前提・・・浄蔵の果たした役割

菅原道真が太宰府に配流（はいる）されて不遇のうちに死んだことはよく知られている。天満宮は受験生に大変人気の神社であり、そこでは、菅原道真は学問の神様になっているのだが、天満宮ができるまでは、道真の怨霊が凄かったらしい。その怨霊を鎮めるために北野天神社ができるのだが、そこまで知っている人は比較的少ないかも知れない。以下、菅原道真の怨霊について少しお話ししたい。

「北の天神縁起」などによると、菅原道真が死んで幾月も経たないある夏の夜、道真の霊魂が比叡山の僧坊に現れて、尊意（そんい。道真が仏教を学んだ師）に向かって、これから都に出没し怨みを復讐ではらす決意を述べ、邪魔をしないようお願いをしたのだそうだ。その後、道真の怨霊は暴れまくることになる。

その後数年経った908年10月、道真配流の首謀者のひとり藤原菅根（すがね）が54才でなくなったが、都では道真の怨霊の祟りだという噂が流れた。そして、翌年、道真の怨霊はいよいよ核心に迫っていく。

道真配流の張本人・藤原時平は、すでにこのとき病床にあったが、天竺渡来の妙薬も効き目がなく、また陰陽師（おんみょうし）の祈祷の効き目もなかったので、文章（もんじょう）博士・三善清行（きよゆき）は、自分の長男であり当時都でもっとも有名であったかの浄蔵（じょうぞう）に加持祈祷をさせることになった。そもそも道真と、浄蔵の父・三善清行（847年—919年）は長年、学者・官僚としてのライバルで、清行はむしろ道長を左遷した時平の側にいた人物でもあったのです。

延喜9年(909)、苦しむ時平の病の原因が道真の怨霊の仕業だとわかると、名だたる僧侶が時平の元に呼ばれ祈祷をおこないます。が、いっこうに効果はみられません。そこで、時平と親交が深く、調伏師としても世間の評判が高かった清行の子・浄蔵が呼ばれ加持祈祷をおこないます。父に連れられた浄蔵が畏まって祈祷すると、床に伏していた時平の左右の耳から青龍の頭があらわれ、道真の怨霊が無実の罪を述べるという妖しげな出来事が起こった。

ところが、4月4日のこと、清行が時平のところに見舞いに行くと、道真の霊は、時平の左右の耳から二匹の青竜となって現れ、次のように語りかけた。

「無実の罪で配流となり、太宰府で死んだ私は、今や天帝（梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく）の許可を得たので、怨敵に復讐を加えようと決断をした。なのにおまえの息子浄蔵は頻繁に時平を加持祈祷している。どうせ無駄なことだから、やめさせよ。」

鬼神を操って冥界のことにも明るい清行は、即座に理解し、浄蔵に時平邸からの退出を命じ、自分みずからも退出したのだが、まもなく時平の命は絶えたという。そして道真の怨念の言葉に、一連の事態の真実を悟った清行・浄蔵親子はそれ以上、道真の怨霊を鎮めることをあきらめ、時平の屋敷を辞してしまいます。

その後、ほどなくして時平は39歳の若さで息を引き取ったのでした。清行は道真のライバルでありながらも、昌泰3年（900）には道真に対して書を送り右大臣を辞するように忠告を促し、後の左遷を回避させようともしていたという間柄。ちょうどこの浄蔵の加持祈祷の際にも、道真の霊が清行に対して、その時の助言に対する礼を述べるという出来事もあったのだとか。

時平の命を奪った道真の霊は、その後ますます激しさを加え、時平の子孫たちを次々と死に追いやり、遂に923年、醍醐天皇の皇太子の命まで奪うに至る。

そして930年6月には、清涼殿（せいりょうでん）に落雷が起こった。これが凄かったようだ。昼すぎの頃、愛宕山の上より起こった黒雲はたちまち雨を降らせ、にわかには雷鳴を轟かして清涼殿の上に雷を落とし、神火を放った。

この結果、殿上の間に侍していた大納言藤原清貫は胸を焼かれて死亡し、右中弁平希世（まれよ）の顔は焼けた。また紫宸殿（ししんでん）にいた者のうち、右兵衛佐美努忠包（みぬのただかね）は髪が焼けて死亡、紀陰連（きのかげつら）は腹部が焼けた。これに悶乱、安曇宗仁（あずみむねひと）は膝を焼かれて倒れ伏すというありさまであった。

そして、この落雷で、天皇も病に伏し起きれなくなったしまった。

おそろしや！おそろしや！

理不尽な処置で人を死に追いやれば、その怨霊はその罪を犯した人すべてに報復を加え、ついには最高責任者たる天皇をも殺しかねないのだという認識が当時の人々の間にすっかり定着してしまった。

939年、かの平将門は新皇即位の儀式をするが、そのときにも道真の怨霊が出てきて平将門をけしかける。

浄蔵の弟・道賢は、わずか12才であったけれど、父清行の命で、・・・吉野は「役行者」ゆかりの金峰山（きんぷせん）に籠もり、父の死にも帰京せず26年間の修験道に励む。道真の怨霊を鎮めるためだ。

オンボダロシャニソワカ
オンバサラダドバン
オンアビラウーシクハン
オンアメリタティー
ゼイカラウーシクマクサマンダボダナン

26年後やっと修験の効なって、「冥界めぐり」に成功、道賢は、道真の怨霊の怨みを聞いてやる。神通力のある修験者に聞いて貰えば道真の怨みもさすがにやわらぐというものだ。

遂に、その後942年になって、道真の霊は「多治比のあやこ」という女性にご託宣を下し、道真の霊を祭らせる。天神の誕生であり、北野天神社の創建へと繋がっていく。今の位置に北野天神社が創建されたのは946年である。

以上の出来事は『北野天神縁起』などで浄蔵と道真の霊が対峙する場面として著されているが、決して浄蔵と道真の怨霊との対決というようなものではなく、無実の罪で流罪となった道真の正当性を語るために、若くして当代一の霊力を持った浄蔵が引き合いに出されているのである。どれほど浄蔵が有名だったかがわかるであろう。

2、文子天満宮

北野天満宮の本殿のすぐ近くに文子天満宮という小さなお宮がある。これは由緒正しきお宮であって、北野天満宮のそもそも何たるかは、小さなお宮から話を始めないと理解できないであろう。菅原道真に関する「文子天満宮祭」というのがあるが、この祭りは、毎年一度祭りの日に、菅原道真の御霊（みたま）にこの小さなお宮へお帰りいただく祭りである。なぜ、菅原道真の御霊（みたま）が北野天満宮の本殿ではなくこの小さなお宮に帰らねばならないのか？ 皆さんには是非それを知っておいてほしい。



この小宮は正式には末社文子天満宮社といい[北野天満宮境内の末社（境内北東に鎮座）である](#)。青の字をクリックしていただくとその場所がわかる。[平野神社](#)の正面入り口を東に少し歩くと、北野天満宮の裏門があり、それを入るとすぐのところだ。北野天満宮の正式参拝をすませて、末社文子天満宮社をお参りし、桓武天皇の母・高野新笠ゆかりの平野神社に参拝、金閣寺に向かうのもなかなか良い散歩道だ。途中に[「わら天神」](#)という由緒正しい神社もある。

さて、北野天満宮の末社である文子天満宮社の元宮に文子天満宮というのが東本願寺の少し東にある。菅原道真の託宣により京都で一番最初に菅原道真をお祀りしたお宮である。菅原道真の乳母だったといわれている多治比文子のもとに、菅原道真かの託宣が下りたといわれているのは天慶5年(942)のことである。多治比文子の夢枕に立った菅原道真は「北野の右近馬場に社殿を造って自分を祀ってほしい」と述べたが、多治比文子にはとても社殿を建てる経済力はなく、自宅のある西京七条二坊の土地の一角に祠を建てて祀ったのが菅原道真公を天神として祀ったきっかけだといわれている。

これから後、北野天満宮の末社である文子天満宮社を単に文子天満宮社と呼び、その元宮である神社を文子天満宮と呼ぶこととする。文子天満宮の入り口には「天神信仰発祥の神社」という石碑が立っている。



[文子天満宮は東本願寺と涉成園の間にある。](#)

その由緒の正しいことは、[神社庁のホームページに掲載されている](#)のを見てもお判りになるだろう。「文子天満宮は、菅原の道真公を「天神」としてわが国で最初におまつりした神社であることから「天神信仰発祥の神社」と位置づけられます。」と書いてある。

さあそれでは、文子天満宮の中に入るとしよう。





菅原道真の乳母は巫女であったと言われており、菅原道真が幼い頃、彼を育てながら日頃神に奉仕していたようだ。この銅像は、その頃の文子の様子を表している。文子が年をとっても巫女としての霊力が衰えることなく、いやむしろますますその霊力は大きくなっていったのではなかろうか。霊力というのは、まあいえば直観みたいなもので、事実、直観の働く人はいる。[今西錦司は、その直観についての体験を書いている](#)が、直観の働く人、霊力の働く人はこの世の中に事実いるのである。文子は、実際に菅原道真の託宣を感じ取ったのだと思う。

3、文子天満宮祭

すでに述べたように、菅原道真に関する「文子天満宮祭」というのがある。この祭りは、毎年一度祭りの日に、菅原道真の御霊（みたま）をこの北野天満宮の境内にある文子天満宮社にお迎えする祭りである。その様子がYouTubeにあるので、まずはそれを見ていただきたい。

<http://www.youtube.com/watch?v=mSbFLPhFEnQ>

これを見て思い出すのは[早良親王の御霊（みたま）の祭り](#)だが、「文子天満宮祭」では何とも不思議な雰囲気の中で「御霊（みたま）移し」が行われていますね。

「文子天満宮祭」についてその謂れを説明するには大宰府から語らなければならない。菅原道真は立派な人物で大宰府でも大変人望が高かったらしい。したがって、亡くなった時、その亡骸は手厚く葬られた。その時の様子は、『門弟であった味酒安行（うまさけ やすゆき）が菅原道真の亡骸を牛車に乗せて進んだところ、牛が伏して動かなくなり、これは道真公の御心によるものであろうと、その地に埋葬されることとなった。』と伝えられている。



その他、菅原道真と牛との関係はいろいろあるようで、天満宮では牛が神の使い（神獣）とされているのである。

かくして、菅原道真の御霊は、太宰府の安楽寺に祀られた。その後暫らく経って京都で菅原道真の怨霊が暴れまくるのだが、もちろん大宰府では怨霊は現れない。まだ大宰府天満宮も創建されていない。大宰府天満宮が創建されるのは、浄蔵をはじめとする天台密教の僧によって、菅原道真の怨霊が鎮まってからである。

菅原道真に随行して大宰府に行っていた人達は、菅原道真が亡くなってから京都に帰ってきたが、その際、安楽寺に祀られている菅原道真の御霊を京都に分祀した。その場所が北野天満宮の南方、上下立売通辺りである。そこが安楽寺天満宮であり、その付近に大宰府から帰ってきた人達が住んだ。そして、その人達が神人となって、安楽寺天満宮における菅原道真の御霊を分祀して、小さな祠を建てたのである。その代表が一の保天満宮であり、安楽寺天満宮の境内にあった。彼ら神人たちの重要な関心は、菅原道真の託宣によって、京都でいちばん最初に立てられたという文子天満宮である。何とか文子天満宮を安楽寺天満宮に遷宮できないものか。それが彼らの願いであったと思う。朝廷筋の支援もあったかもしれないが、ある時期、文子天満宮は安楽寺天満宮に移され、文子天満宮は長らく安楽寺天満宮の境内にあったのである。

安楽寺天満宮の境内の文子天満宮は、明治時代に北野天満宮の境内に移設され、現在は、文子天満宮御旅所という名称で現地に残されている。

文子天満宮は、最初が下京区のそれであり、明治時代に北野天満宮の境内に文子天満宮社が建立された。その間、文子天満宮は長い旅をしていたのである。したがって、かつて広大な安楽寺天満宮の境内にあった文子天満宮は、現在、「文子天満宮お旅所」と呼ばれているのである。

「文子天満宮お旅所」は、「文子天満宮祭」の重要な舞台であるにもかかわらず地元の人しか判らないような小さな神社であり、その場所も非常に判りづらい。



正確にその場所をいうと「天神通上下立売通上がる」である。しかし、タクシーに乗ってこんな住所を言ってもまずそこに行くことはできないだろう。現地の住所表示は次のようになっているが、御前通西裏の通りというのが天神通のことである。御前通というのは、北野天満宮の正門から南に延びている通りで、これはタクシーの運転手にもよく知られている。実は、その一本西にあるのが天神通である。この住所表示にある「上の下立売通」というのは「上下立売通」のことだが、下立売通の一本北にある。なお、「上」というのは「かみ」と呼び、「下立売通」というのは「しもだちゅうりどおり」と呼ぶ。

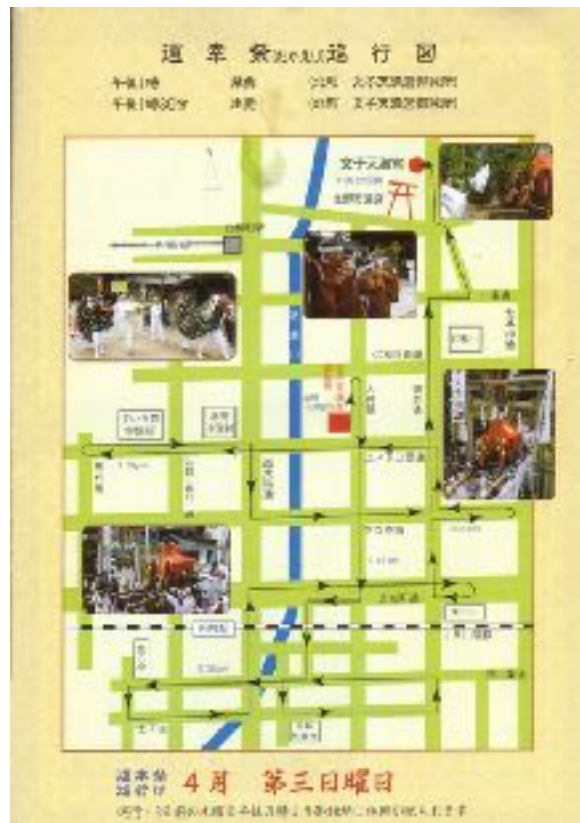


なお、天神通は御前通の一筋西にあるが、その一条通との交差点のすぐ西側にかの有名な「大將軍八神社」がある。「大將軍八神社」については、私の参拝日記があるので、この際それを紹介しておきたい。「文子天満宮お旅所」にお出かけのときには、是非、「大將軍八神社」にもお参りしてほしい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/saipaini.pdf>

さて、「文子天満宮祭」というのは、北野天満宮の北角にある文子天満宮社から菅原道真の御霊（みたま）を年に一度「文子天満宮お旅所」にお迎えして三日間祀るという祭りである。「文子天満宮お旅所」から神輿が出発して、文子天満宮社で菅原道真の御霊を乗せてからその神輿が「文子天満宮お旅所」に帰ってきて、三日間の祀りが始まるのである。それが終われば、菅原道真の御霊は神輿に乗って北野天満宮の文子天満宮社にお戻りになる。

神輿は「文子天満宮お旅所」から北野天満宮に行って帰ってくるという行列を二回繰り返すことになる。そのコースはつりの通りである。



文字天満宮お旅所から出発する神輿

(<http://d.hatena.ne.jp/ritszuiki2011/?of=29> より)



菅原道真の御霊（みたま）移し

(<http://kyotoreport.seesaa.net/article/272895565.htm> より)



(<http://d.hatena.ne.jp/ritszuiki2011/?of=29> より)

上の写真は「文子天満宮お旅所」での神輿であるが、これは一番最初に出発するときの写真である。菅原道真の御霊をお迎えしたときの写真をネットで調べただけれど見つからなかった。機会があれば是非私自身が写真を撮って皆さんにご紹介したいと思っているが、多分きれいに飾られて祭壇なども設けられるのではないかと想像している。

「文子天満宮祭」は現在地元の有志の方々で人知れず行われているが、歴史的に大変意義のあるので、北野天満宮の公式祭りとして、「ずいき祭り」のように賑やかな祭りにしてほしいと思う。この「ずいき祭り」でも菅原道真の御霊移しが行われている。

4、天神信仰の本質について

空海の場合は最澄のような桓武天皇との特別な関係があったわけではないので、北野天満宮創建時の祭祀もそうであったが、平将門の乱の時も平将門の生霊（いきりょう）調伏の主役は、天台密教が担った。それが「平将門の挫折」の基本的要因となった。もちろん、真言密教が怨霊調伏の呪力に劣っていたというわけではない。一般社会における御霊信仰は、空海の怨霊調伏が発端になって普及した。現代の怨霊調伏は、靖国神社においてなされなければならない、これは、私の歴史認識からすれば、天台密教が中心となって、真言密教も協力してあらゆる宗教団体が参画してなされなければならないように思われる。国民の安寧と国際平和を祈るためであり、あわせて天皇の弥栄を祈って欲しい。

天台密教と天皇との関係は歴史的に見てなみなみならぬものがある。

京都御所には「土足参内」という習わしがある。「土足参内」とは、回峰行の創始者・相応和尚(最澄の孫弟子)以来、千年の格式と伝統を誇る習わしである。由来は、文徳天皇の女御藤原の多賀幾子が物の怪に悩まされた時、京都市中の高僧たちの呪法も一向に効き目なく、師匠円仁のすすめにより、12年籠山中の相応和尚が草鞋履の行者姿で参内し加持したところ、女御の病気は直ちに平癒したと言われている。千日回峰行を満行した行者のみ許されるもので、京都御所内小御所に土足のまま参内し、国家安寧と玉体安寧を加持奉修する。「土足参内」は今も行われている。

また、比叡山と深い関係にある「[八瀬童子](#)」というのは、歴史的に見て天皇となみなみならぬ関係があった。

現在、天皇は靖国神社に参拝されていない。きっと心配されながら、いずれ状況が整えば、安心して靖国参拝をしたいとお考えになっているに違いない。そういう状況を整えるのは政治家の責任だが、私たち国民もそのことに無関心でいていい筈がない。私は、天神信仰の本質を深く考えることによって、靖国問題解決の糸口も見えてくるのではないかと考えている。

天神信仰の本質は怨霊信仰にある。だとすれば、菅原道真の怨霊を鎮めたのは増命（ぞうみょう）や尊意（そんい）や浄蔵を中心とした天台密教であるから、天神信仰の生みの親は天台密教ということになる。天台密教は北野天満宮の祭祀を当初に取り仕切ったのであり、北野天満宮は菅原道真の怨霊と深く関わっている。北野天満宮はただ単に菅原道真の御霊を祀った神社というだけのものではけっしてない。太宰府天満宮は、菅原道真の御霊（みたま）を祀ったという点では由緒正しい神社であり、その格式は極めて高いものがあるけれど、菅原道真の怨霊と深く結びついている訳ではない。私は、神社には大きく分けて二つの性格の神社があると考えている。不幸な死に方、理不尽な死に方をした人の怨霊を祀る神社と怨霊とおおよそ関係なくただひたすらその神威を頼って祈りを捧げる神社の二系統である。北野天満宮は前者であり、太宰府天満宮は後者である。

そこで、この際、そのことに関連して一言申し上げておきたいのだが、先ほども触れたが、私が重大な関心を持っている問題に靖国神社の問題がある。靖国神社は明らかに後者に属し、北野天満宮と同じ性格の神社である。したがって、靖国神社の祭祀については、現在、天台密教にそれだけの力があるかどうか判らないが、かつて増命（ぞうみょう）や尊意（そんい）や浄蔵らが行った天台密教の怨霊鎮めの儀式には、関係者の深い関心を寄せて欲しい。靖国神社の祭祀というものは、靖国神社の宮司に任せておいていいというような問題ではけっしてない。では、靖国神社の祭祀は、誰が中心となって行えば良いのか？ この問題は大変難しい問題であるので、ここでは御霊信仰に関する深い歴史的考察が必要で、そう簡単に答え得る問題ではない。したがって、ここでは増命（ぞうみょう）や尊意（そんい）や浄蔵らの行った天台密教の怨霊鎮めの儀式の歴史的意義の重要性だけを指摘するにとどめておく。ただ一言、現在の私の考えを申し上げておくと、私は、靖国神社の怨霊鎮めは、やはり天皇を中心として、天台密教のみならず、あらゆる宗教がこれに立ち向かうべきではなかろうかと考えているが、このことについては、御霊信仰に関する私なりの歴史的考察を行った上で、機会を改めて説明させていただきたいと思う。